

“Sketches among the Poor” 小論

「さらに美しい魂を見るという精神」について

長 浜 麻里子

I.

本論の目的は、Elizabeth Gaskell の “Sketches among the Poor” を読み、この詩作の意味について考えることである。この詩は “Sketches among the Poor No.1” というタイトルで（以下 “Sketches” と省略する）1837 年、*Blackwood's Edinburgh Magazine* の 1 月号に掲載されたが、当時、雑誌に掲載されていた多くの詩がそうであったように、作者名は記されていない。143 行の比較的長編といえる物語詩で、詩形は一部を除き（5-7 行）heroic couplet、iambic pentameter、内容は Mary という名前の一人の女を描いている。詩作の時期は、1836 年 7 月 4 日に執筆されたソネット “On Visiting the Grave of My Stillborn Little Girl” の後、すなわち同年 7 月上旬から、ほぼ 1、2 ヶ月の間に書かれたと推測される。これは、Gaskell の処女作 *Mary Barton* が書き始められる、ちょうど 10 年前のことである。

Knutsford Edition を編纂した A. W. Ward は、この詩を *Mary Barton* の Biographical Introduction で掲載し、次のように述べている。

「[この詩を再版する価値があるように思われるのは、*Mary Barton* の] 物語における最も魅力的な登場人物、及びきわめてパセティックな一節が、この詩的 “Sketch” の中にすでに示されているからだけでなく、主としてこの詩は、私が思うに、作家としての Gaskell 夫人の才能の真髄である洞察力と思いやりの心を顕す最初の証拠を備えているからである。」¹

この一文は、“Sketches” の性質を適確に語っている。“Sketches” に描かれている女 Mary は、*Mary Barton* における老婦人 Alice Wilson である。² この詩には、

確かに現実の生活のなかに故郷の風景を幻視する女の哀愁溢れる最期の場面が示されている。また、2つ目の指摘は“Sketches”がGaskellの作家としての出発点であったこと、そして彼女の作家としての才能の真髓が「洞察力と思いやりの心」(an insight and a sympathy)にあることを示している点で重要である。だが、“Sketches”にはさらなる疑問点が生じる。この詩はむしろ、Mary (= Alice)のヴィジョンと「パセティックな一節」を、小説の筆以上に見事に描写しているのではないか、という点。また、この詩でGaskellは田舎から町に出てきた孤独な一人の貧しい女を描きつつ、現実と幻想や夢、美と真実との関係を捉えようとする詩想を示しているのだが、この詩想こそGaskellの作家としての真髓、エッセンスに大きな役割を果たしているのではないか、という点である。

II.

Gaskellは6つの段落に分けて物語を綴っている。まず最初の段落で、物語の語り手が登場し、幼少時代、陰鬱な通りに囲まれた暗い家にいたこと、それにもかかわらず人々は幸福であったこと、そして、そのなかに一際心の澄んだ女が住んでいたことを語り始める。彼女は若くも年寄りでもなく、独身で身寄りもなかったが、思慮深く誠実な女性で、友人から愛情を得ていた。この「愛情」(affection)こそ、彼女があらゆるものの中で尊んでいたものだった。だが、語り手は第二段落で、家族の団欒をもたない彼女が孤独でないという言い方は、正確ではなかったのではないかと自問する。それにしても、彼女がいつも周囲のものをうっとり眺めていたのはなぜか？ 彼女の振る舞いは、美しい鳴き声をもちながら、宝の巣で黙って卵を抱く鳥のようであった。彼女の「日々の詩心」(daily poesy)とその胸深くに隠されていた「はかないの望み」(fond hope)とは一体何だったのか？

第三段落。それは、幼年時代の故郷の家であった。田舎の家について聞くときはいつでも、彼女の真剣な顔に微笑みが輝いた。彼女の心のなかでは一つの希望が跳ね上がり、その一部が微笑みとなっていたのである。第四段落は、Maryが故郷の風景を幻視する場面であり、愛する人々と過ごした懐かしい幼年時代、それを際立たせる自然の美しいヴィジョンが存分に語られる。小川が歌うように流れ、その水泡がアヤマメや青いワスレナグサの生える所に浮かんでいる。人目に付

かない場所に立ち、春のそよ風が吹くたびに花びらの雨を散らす瘧だらけのサンザシの樹。花の室にやって来てブンブンと歌うミツパチ。サンザシの緑を明るく輝かせ、名残惜しむように暮れていく太陽。そして、幼い頃の家。それは他人の目には貧しく質素に見えたとしても、愛のこもった Mary の胸のなかでは、古びて曇った窓枠にも、くすんでこぼこしたコケにも、誰もが幼年時代の記憶のなかに見たであろうバンダイ草にも限りない魅力が隠れている場所であった。そして、彼女は夢の中で、妹とともに遙か遠く、山々の中をさまよい歩く。妹は娘盛りを迎える前に亡くなっていた。ここで、懐かしい幼年時代のヴィジョンは一瞬にして消え去ってしまう。

ああ、眠りよ！おまえは子供の頃の心呼び戻してくれるけれど、／朝露が玉なす前に希望は離れていってしまう。／おまえは亡きものたちを思い出させ、悲しみで満たすのだ、／悲痛、それ自体が彼女から泣く力を失わせてしまうまで。／おまえの国は妖精の国、そこには何か不思議な隠された呪文で／夢の中に呼び起こされる陰が住まう。(66-71)

ところが、この悲痛を宥めるのも、また幻想である。Mary を凝視する Gaskell の筆致は冴え、希望と悲嘆の間で激しく揺れながら、日々の現実の光景を故郷の風景と二重写にせずにはいられない Mary の心の裡が伝わってくるようである。

だが、「希望」と「記憶」がはかない望みを見続けるとき、／ああ、眠りよ、「昼」と「目覚め」も夢を持つのだ。／だから、メアリのなかにある夢は、彼女がその手を一日中、／骨折り仕事に酷使するとき、このうえなく羽撃いた。／彼女の思考は、手を使うと、さらにはるかに自由にさまよい、／やがて気持ちは落ち着き、現実を宥めた。／ごく数週間のあいだに、あるいはもう少しすると、／彼女を悲しみや痛みに縛りつけていた鎖は解かれ、／陰鬱な街や暗い空に別れを告げて、／彼女の宝物たる家は、その恋いこがれるまなざしの持ち主を祝福し、／草に覆われた人目に付かない場所も、木々の茂る場所も、／子供のとき大喜びしていた頃の場所と同様、美しくなった。(72-83)

第五段落では、このように幻想を心の糧として生きていた Mary が、徐々に視力を失い、完全に子供に戻ってしまう場面が描かれる。彼女の悲しみは、自らの離別体験と孤独からくる悲痛だけではなかった。もっとも尊んでいた愛情から、彼女は友人の悲しみを自らの悲しみとして受け取ったのである。泣き疲れた友人を、Mary は母のように宥め、静かに眠らせ、休ませた。こうして、何年もの歳月が過ぎ去り、彼女は人のためには泣いても、自分のために涙は流さなくなった。しかし、そのような生活が、彼女に変調をもたらす。なお、友人たちは迷宮から導いてくれるよう彼女に祈りつつ、はじめて彼女の孤独な運命に思いを馳せ、哀れと思う。しかし一方で、Mary は「楽しい空想」(Fancy wild)によって、故郷の父の家において自分は子供だと思ふようになっていく。母に休ませてもらい、ヒバリによって目を覚まし、花々の中に隠れたミツバチが一日の歌を陽気に歌う。安息日の鐘が、高く低く鳴り響いている。彼女は妹とひざまづいて祈り、毎夜父の祝福を分け合っている。彼女の人生は「うれしい想像」(glad imagings)に包まれ、いつのまにか幼い頃の美しい記憶で充満してしまう。

第六段落で語り手は、Mary の最期は天からの祝福であったのだ、彼女の秘めた願望はこれまで天で知られていた、だからその答えは神秘のなかで与えられたのだ、と語る。Mary は優しいまどろみのなかで横たわり、まもなく死を迎えるだろうことが詠われて、この詩は終わっている。

III.

“Sketches” が *Blackwood's* に掲載された翌年の8月、Gaskell は Mrs. Howitt に宛てた手紙の中で次のように言っている。

「私たちは、かつて貧しき人々のスケッチを Crabbe の様式で書こうと試みただけでなく（いまはこんな僭越なことは考えていません）、さらに美しい魂を見るという精神で書こうと考えました。そして一つ、一つだけが1837年1月の *Blackwood* に公表されたのです。でも、私たちはこの計画をヨーロッパノイバラの近くで話したと思います、それ以上は続かなかったのですから。」³

この簡潔で、控えめな語り口から推測されることは、夫 William と共に、Crabbe の様式で書こうと決めたこと、[Crabbe より] さらに美しい魂を見るという精神で書こうとしたこと、この時 “No.1” 以外にもいくつか詩作したと思われることである。

について。George Crabbe (1754-1832) は、いわゆるロマン派の時代に活躍した詩人であるが、彼の詩の特徴は、様々な詩の形式を試みたロマン派詩人たちと違って、17世紀の Dryden、ついで 18世紀の Pope によって完成されたといわれる伝統的な heroic couplet を使ったことであった。さらに、ロンドンから故郷サフォーク州に戻って牧師となった Crabbe は、この地方の方言や実際の話し言葉を取り入れて、リアルに道徳的に貧しい農民の生活を詩作品に仕上げたことで知られている。*The Village* (1783) をはじめ作品は多く、当時から評価の高い詩人だった。

Jenny Uglow によると、Crabbe の名前は、Elizabeth Gaskell の 1836 年における詩作および詩の読書計画の中に入っていた。一方で、夫 William はマンチェスターの貧しい地域の職工たちに「詩人と卑しい生活の詩」(“The Poets and Poetry of Humble Life”) という説教を 4 回にわたって行い、このような日々の延長線上に彼らの “Sketches” 執筆計画があった。つまりマンチェスターのユニテリアンの牧師夫妻は、30 年前にサフォークのアングリカンの牧師がしたように貧しい人々をスケッチすることで、一つの地域社会を描き、道徳的教訓を引き出そうとしたのである。⁴ Elizabeth 自身が言っているように “Sketches” は夫と計画して執筆されたのであり、実際、Crabbe の様式で書き上げられている。だが、Ward によれば、“Sketches” は全体として Crabbe の物語風スケッチに匹敵する表現力を十分持っていたとは言えなかったのであり、⁵ Uglow によれば、彼らの詩はアイロニーや、方言を取り入れた Crabbe の力強さに合わなかったのである。Gaskell の語りは、感性溢れる詩的表現を持ちつつ簡素で整理されている。第五段落の、あの「きわめてパセティックな一節」ですら、Gaskell は詩という形式のなかで一人の貧しい女の心の裡を凝視し、それを伝えることに集中しているようにみえる。

では、「[Crabbe より] さらに美しい魂をみるということ」は何を意味して

いるのだろうか？ Uglow はこれにはもう一人の詩人 William Wordsworth (1770-1850) の影響があると論じている。まず、Gaskell 夫妻が *Lyrical Ballads* の 'Preface' を研究していたことを挙げ、二人は Wordsworth 同様、中層・下層階級の人々が実際に話す言葉を使わなかったが、「普通の生活から出来事や状況を選び出し、それらの上に想像力である種の色付けをすること」を試みたのだと言う。⁶ Wordsworth が 'Preface' において新しい詩の題材として告げた「卑しい田舎の生活」(humble and rustic life) と、⁷ William がこの時期に行った説教のタイトルは重なる。Wordsworth の影響があったことは確かであろう。(だが何故、Wordsworth の名前は Gaskell の手紙に出てこなかったのか？ *Mary Barton* の motto にも、Crabbe や、Coleridge、Keats といったロマン派詩人の詩句は採られているのに、Wordsworth の詩は一篇も無い。⁸)

Uglow が指摘するように "Sketches" の Mary は、Wordsworth の 'Poor Susan' を想起させる。⁹ Susan は田舎からロンドンに出てきた下働きの女で、街角で鳴くツグミの調べを聴き、生まれ故郷の風景を幻視する。彼女の幻想にも、小川や緑なす故郷の自然とともに、Mary のヴィジョン同様、彼女が愛した唯一の場所である素朴な生家が現れる。「美しい魂」とは、このような故郷の田園風景、あるいは幼年時代の懐かしい思い出のことなのだろうか？ いや、いま少し論考が必要である。

Wordsworth は Susan の幻想を、基本的な感情や単純な印象が想像作用に及ぼした効果であって、想像力そのものの行使ではないとし、厳密に言えば、これは目覚めているときの夢であると述べている。¹⁰ Mary の幻想も同じ種類の夢である。Susan の幻想がやがて、彼女の目の前から消えていくように、Mary の幻想も現れては消えていく。Gaskell が Mary の幻想を「眠り」と呼び、「希望」と「記憶」がはかない願いを見続けるとき、「昼」と「目覚め」も夢を持つのだと語るとき、Gaskell が Mary の幻想を Wordsworth と同じ意味で定義していたことは明らかである。このとき、さらに Gaskell が、眠りの国は「妖精の国、そこには何か不思議な隠された呪文で、夢の中に呼び起こされる陰が住まう」と語っているのは注目に値する。これはまさに、妖精信仰(フェアリー・ピリーフ)である。幼年時代の懐かしいヴィジョンは Mary に現実を忘れさせるが、それは愛する妹の影を呼び起こし、一瞬にしてさらに悲惨な現実を引き戻す。この悲痛

は 'Ode to a Nightingale' における John Keats (1795-1821) の「寂しさよ」(Forlorn !) と同じである。

だが、“Sketches” の Mary はこれを誰にも語ることなく、現実の光景を理想のヴィジョンと繰り返し重ね続ける。現実を理想に変える彼女の「詩心」は、泣き疲れた友人を宥める愛の水源でもある。視力を失った Mary には、fancy wild によるヴィジョンが見えてくる。ヴィジョンとして捉えた風景は現実ではない。しかしこのとき、Mary のヴィジョンは真実味を帯び、彼女の人生そのものになっている。Wordsworth は 'Preface' に「[卑しい田舎の生活にあって] 人間の情感と美しく恒久的な自然の形象は一体化する」と記しているが、¹¹ Mary は最期のまどろみのなかで美しく恒久的な自らのヴィジョンと一体化する。さらにここで、アダムの夢について熱心に考察した Keats の言葉が思い出される。

「ぼくは心からの愛の神聖さと想像力の真実以外、確信の持てるものはない 想像力が美として捉えたものは真実であるにちがいない 以前に存在していてもいなくても というのは、ぼくは我々のあらゆる情感と愛は同じ考えで、それらは崇高になるとき本質的な美を創るからだ。」¹²

Mary の fancy wild は、目覚めた夢であり、感覚の次元に属してはいるが、“Sketches” の文脈において、それまで彼女が見ていた夢想とは異なる性質をもつ。これを Gaskell は、Mary の最期に祝福が訪れたのだと言い、この時の Mary のヴィジョンは「天使の声」(angel voices) によって呼び戻されたものだと言っている。

多くの人には見えない、御名によって隠された祝福が / 彼女の愛に満ちた思考のもとに訪れた。(130-131)

そうだ！天使の声が彼女の幼年時代を呼び戻し、 / 薄暗く悲しみに満ちた人生をぬぐい去ったのだ。(136-137)

Mary の最期は、Keats の言葉でいえば「本質的な美」(essential Beauty) である。

Gaskellの「美しい魂」とは、これを指しているのではないか。GaskellはCrabbeの詩の様式で“Sketches”の執筆を始め、田舎から町に出てきた孤独な人の「本質的な寂しさ」(essential loneliness)を書こうとしたが、¹³ その孤独で貧しい労働者の中に「本質的な美」を見い出そうとした。これが「[Crabbeより]さらに美しい魂をみるという精神で書く」ということなのであろう。

実際に公表されたのは“No.1”のみであったから、それ以外の詩的スケッチが作品として完成されていたかは不明である。しかし、それから10年後に*Mary Barton*が執筆される経緯を考えると、Gaskellが他にも執筆していた可能性がある、という事実は興味深い。“No.1”の内容から見て、すでにこの時期に*Mary Barton*の登場人物たちのスケッチの幾つかが、Gaskellの脳裏にあったことは十分考えられる。Gaskellの創作活動は、夫Williamのパートナーとして、社会的に道徳的に書くという立場から始められたのであり、¹⁴ おそらく何人かの「貧しい人々」が、Gaskell夫妻の間で話し合われていたのだろう。このように考えると、後に小説を書くことを勧めたWilliamの言葉は、根拠のある助言として受け入れられたはずである。

“Sketches”におけるGaskellの語りは巧みで、読者はMaryの心の軌跡をたどり、その人生について思いを馳せることになる。そして、一見唐突で悲劇めいたMaryの最期の場面で、読者は一種の心の安らぎに似た読後感を与えられるのである。Gaskellが*Mary Barton*を「マンチェスターの人々を見くびってはいけないということ」を伝え、作家として「身近な現実をありのままにマンチェスターの人々の声に注意を払って」書いたというEllen Moersの解説は示唆に富んでいる。¹⁵ Gaskellはマンチェスターの貧しい人々を「美しい魂をみるという精神で」描き出そうとしたのである。その後のGaskellに詩の作品はないが、Gaskellは“Sketches”という詩の執筆によって、彼女自身の創作のエッセンスを掴んだのであろう。

注

- * 本稿は、日本ギaskell協会第15回大会(2003年10月5日)において発表した「ギaskellの“Sketches among the Poor”について」に加筆修正したものである。

1. A.W.Ward, Biographical Introduction. *Mary Barton* (Knutsford Edition). By Mrs Gaskell. New York: AMS, 1972. xxiii.
2. Cf. Edger Wright, Appendix C. *Mary Barton*. By Elizabeth Gaskell. London: Oxford UP, 1998. 471.
3. Ward xxii.
4. Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber, 1999. 100-102.
5. Ward xxii. A.W.Ward は George Crabbe の詩集も編纂している。
6. Uglow 102.
7. William Wordsworth, *Preface to Lyrical Ballads*. Trans. with Notes Syunichi Maekawa. Tokyo: Kenkyusya, 1967. 6.
8. Cf. Wright, Explanatory Notes. 490.
9. Uglow 102-103. 実際には 'Poor Susan' の他に Samuel Bamford の 'Farewell to My Cottege' との類似性も指摘されている。
10. Kenkichi Kamijima, Notes. *Lyrical Ballads* (First Series). By William Wordsworth. Tokyo: Kenkyusya, 1995. 162.
11. Wordsworth 8.
12. John Keats, *Letters of John Keats*. Ed. Robert Gittings. London: Oxford University Press, 1970. 36-37. Keats は Milton の *Paradise Lost* を思い浮かべつつ、「想像力はアダムに喩えられるだろう 彼は目覚め、それが真実であることを知った」と述べ、さらにアダムに喩えられる夢は「想像力とその天上的反映は、人間の生とその精神的な反復であるという確信となるようだ」と語っている。
13. Uglow 102.
14. Uglow 100.
15. 青山誠子訳、『女性と文学』(*Literary Woman*. By Ellen Moers) 東京：研究社、1978年、44、46。

参考文献

Norma Dalrymple-Champneys and Auther Pollard, General Introduction and Chronology. *George Crabbe: The Complete Poetical Works*. London: Clarendon Press, 1988.

